

## 「劇場通り」を再考する

——長野県須坂市「須坂劇場」をめぐるテキストと語りから——

廣瀬 由子

HIROSE Yuzu

筑波大学大学院 歴史・人類学サブプログラム 博士前期課程

【要旨】 本稿の目的は、国内における「劇場通り」の特性を整理したうえで、長野県須坂市の劇場通りを事例に、新道がどのような経緯のもとに劇場通りとして変容し、存続してきたのかを論じることにある。

「劇場通り」の名称は1914年に開場した須坂劇場に由来する。須坂劇場は劇場から映画館、スーパーマーケットへと変容しながらも、劇場通りは一貫して、地域の人びとを集める通りとして機能していた。

それでは劇場通りは、60年以上にわたりいかにして人びとを集め続けていたのだろうか。本稿では、国内における街路空間の広場の特性を確認したうえで、街路空間を五感と紐づけられる体験を通して検討する分析アプローチを提示し、日記資料や新聞記事、そして劇場通りをめぐる語りから検討を試みる。はじめに、須坂劇場は、製糸家の有志らによって公会堂的意味づけのもと設立されたことを考察した。そして、テレビの普及や劇場数の増加により、須坂劇場の求心性は薄らいでいくことを指摘した。隣接する街路の自動車交通量の増加、そして富士通信機の移転により、劇場通りの求心性は次第に富士通須坂工場へと移行していく。こうして1892年に新たに整備された新道は、劇場という求心力によって発展を遂げていくものの、高度経済成長期以降は工場へ向かうための通り道として役割を変容させていくことを指摘した。劇場通りはその象徴を劇場から工場に移すことによって、劇場通りの名を残しつつ劇場前の広場的街路空間を維持し続けたのである。

キーワード：劇場、劇場通り、商店街、近代化、街路空間

### Rethinking Theater Street

—— Case study of “Theater Suzaka” Nagano Prefecture, Japan ——

**Abstract** : This paper reconsiders the transformations of “Theater Street” in Japan through examining the history of Theater Street in Suzaka, Nagano prefecture. As some researchers pointed out, Plaza wasn't naturally generated in Japan. Hideaki Ishikawa (1893-1955) planned “Shinjuku-Koma Theater Plaza” and it said to be the first “theater plaza” in Japan. Looking back at the history of the plaza, the temple and street played a big role.

So, why hasn't the theater plaza existed in modern Japan yet and what is the theater street role in the local community? To demonstrate these points, the author focuses on the broader context of “Theater Street”, this was done through the study of a local journalist's diary, written around the street of the theater's establishment, and a survey of present-day residents of the old

theater street and sightseers.

From these surveys, the author examines the reason why theater Suzaka built, and discovered the role of the democratic movement in the theater's founding. "Theater Suzaka" in Nagano prefecture Japan, rang down the curtain on its sixty-three years history in 1977. However, its history had not been revealed. Ito (1991) analyzed the history of local theaters in Nagano, and found the most common purpose of why it was built in modern Japan. According to his analysis, the chief among these reasons were providing entertainment for the local silk reeling factory workers and citizens. Suzaka's local merchants felt the need to create their own public hall, not only to entertain their workers, but also for the community, This is considered to be the theater's foundation.

Before its establishment in 1914, the street was still a bustling district known for its cuisine and was frequented by locals, factory workers and even silk merchants from Yokohama. But the theaters construction converted the street to a more commercial area and it became a gathering place for the local community on shopping street for the residential area. However, due to the spread of television in the 1960s and the increase of theaters in Suzaka, changed the symbol of theater street, from the theater to the factory.

In this period, many local theaters in Japan closed down due to social changes such as depopulation, residential development, and financial difficulties. This paper seeks a new way to research the theater's history through how the street effects the theater and its local people.

**Keywords** : Theater, Theater street, Shopping district, Modernization, Street space

はじめに

### (1) 劇場通りはいかに形成されてきたか

本稿の目的は、日本における「劇場通り」の特性を整理したうえで、長野県須坂市の劇場通り（新道）を事例に、新道がどのような経緯のもとに劇場通りとして変容し、存続してきたのかを明らかにすることにある。すなわち本稿は劇場通りという街路を通して劇場を捉え直すことによって、地域社会における劇場と劇場通り、そして近隣住民との相互作用性を描き出そうとする試みである。

明治初期の岐阜県における農村舞台の設立過程（後藤 1996）や、盛岡市内の劇場の設立と衰退の要因（小野澤・細江 2012）では、社会変容に劇場が柔軟に対応しながら存在し続けてきたことが明らかになっている。このような地域と劇場の密接な関係性が明らかになる一方で、劇場を支える環境については詳細に論じられてこなかった。一方、アンケート調査によって現代における地方劇場と住民の意識のありようを明らかにした研究（浦部ほか 2017）や、学芸会を通した小学校との関わりを明らかにした研究（山崎 2018）は劇場の環境への検討必要性を指摘してきた。このように劇場外部へと議論を展開することによって、地域社会において劇場が果たしてきた公会堂的側面や住民同士の交流創出が浮き彫りになるものの、劇場と地域社会をつなぐ劇場前の街路空間「劇場通り」そのものには注意が向けられてこなかった。その理由として、劇場前に広がる街路空間は劇場の常設化により形成されたという副次的産物として捉える理解（中西 1985；守屋 1985）があると考えられる。そのため劇場が求心力を失うことは劇場通りの衰退をもたらすという劇場との関連性でのみ取り上げられる傾向にあった。<sup>(1)</sup>

しかし、このような視点でのみ劇場通りを考えることは、劇場前の街路空間を劇場の副次的産物という一面の理解にとどめている。本稿が目指すのは、劇場前の街路空間そのものに目を向けることで、従来見過ごされてきた劇場と人びと、そして街路という三者の相互作用性を示すことにある。ジェイコブス（1961）が生活の場としての街路空間への見直しを促したように、こうした街路から劇場通りを論じることは、地域社会における人と文化の結節点としての劇場を再考することにもつながるだろう。

なお、大正初めの劇場から常設映画館の変遷を射程とする以上、本稿において「劇場」とは、「明治以降から戦前にかけて開場した演劇・映画の公演の場」を指すものとし、「劇場通り」とは、「劇場前に直線状に広がる街路空間あるいは商店街」を示すものとする。劇場前に近接する街路空間を指す類似する語としては芝居町や劇場街などの語も挙げられる。筆者は劇場街の一部分として劇場通りを捉えている。次項からは上記概念を整理したうえで、既往研究でいかに街路が論じられてきたのかを概観し、国内における「劇場通り」の特性を整理したうえで、劇場通り上で生じる「体験」から論じる本稿の分析視角を示していく。

## (2) なぜ劇場前広場は生じえなかったのか

西欧諸国においては劇場と広場は密接な関係を果たしてきた。劇場設置計画に劇場前広場の設計が伴われる要因として「劇の前後の時間までも『演劇を見る一連の行為』」（元岡 1996：13）という意味づけがなされていたのである。しかし、日本においては石川栄耀（1893-1955）の新宿コマ劇場前広場の設計以前に、本格的な劇場前広場は存在しなかったとされている。

それでは、石川が設計するまでになぜ劇場前広場は生じえなかったのだろうか。主な要因として明治末以降の近代劇場の文化を導入した日本においては、劇場建築は輸入したものの、劇場前広場の環境整備までは輸入されなかった可能性が考えられる。そのうえ、劇場前に広場が設計されることのなかった潜在的な要因として、①街路のもつ広場の特性と、②滞留促進の装置としての商店街の形成といった二つの要因があったのではないかと考えている。本節では以上の2点の要因について論じていく。

都市デザイン研究体（1971）は、寺社空間や街路などの広場として設計されていない空間が、人びとの主体的な働きかけによって広場としての意味づけをもつようになるという「広場化」の概念を示した。こうした広場化の概念は、民俗学においても街路の再考をもたらしている。福田（1996）は、ツジ（辻）のもつ交差した地点としての特性に注目し、辻寄合などの風習に着目することで、ツジが開かれた広場としての意味をもっていたことを指摘した。以上のような既往研究で例示される広場化しうる寺社空間、街路、辻は江戸時代以降、芝居が上演されてきた場でもある。このように、人びとの交流は国内においては必ずしも規定の場に偏ることはなく、街路空間において人びとの交流がなされてきたことが要因のひとつに挙げられる。

しかし、劇場前に広場が生じえなかった要因として、そもそも日本における劇場前の空間は人びとが集まる場を想定しえなかったといえる。その理由を探るためには、江戸時代の芝居町の形成過程にさかのぼらなくてはならない。幕府は座本に対し劇場営業権の公許により劇場を管理していた。上演を許された劇場には櫓をあげることが許され、取り締まりのために複数の劇場を集約させた芝居町が

形成されていくこととなる。たとえば京都においては元和年間（1615-1624）に京都所司代の板倉伊賀守勝重により四条河原が芝居町として指定され、劇場の公許が当該地域に限り許されている。近藤（2011）は芝居町について「悪所」とみなされており、「劇場の周囲には、付属する芝居茶屋や数々の見世物小屋のほか、芝居関係者の住居が建てられ、劇場を中心とした歓楽街ができ上がることになった<sup>(2)</sup>」と指摘している。こうした複合的な劇場前の街路空間の意味づけは、幕府の200年以上にわたる厳しい取り締まりによって定着していく。江戸においては、1651年に芝居町は上堺町（葺屋町）、下堺町（堺町）、木挽町の3か所に指定され、約200年にわたり芝居町を形成した。しかしこうした芝居町はこれまで指摘されてきたように、「悪所」といわれ、度重なる火災の出火原因となっていたために、1841年には浅草猿若町に芝居町を一か所に集約させることによって取り締まりがなされていた。

明治以降幕府の取り締まりが解消され、芝居町は解消されるものの滞留装置としての通りの性質は、劇場街（劇場通り）に引き継がれていく。森田座は、1872年に浅草猿若町から新富町に移転（1875年に新富座と改称）、市村座は1892年下谷二長町に移転している。こうして劇場は分散し、芝居町は解消されるものの、分散した各劇場をとりまく劇場街が形成されていく。明治以降劇場前の街路は“Theater street”として国外にも紹介され、明治20年代（1887-1896）の横浜を訪れたモラエス「日本の追慕」<sup>(3)</sup>に活写されるように、各都市に劇場街は散在するようになり、商店が集積する街路空間を形成していくこととなる。一方で、こうした劇場通りの来訪者による「体験記」の描写が示しているのは、劇場通りでの「体験」によって劇場通りの空間性を把握する必要性である。こうした滞留装置としての劇場通りに向かう人びとの目的は観劇に限らない。

つまり、日本における劇場前の街路空間は、商店の並ぶ娯楽空間でもあり、かつ生活空間でもあったのである。石川のコマ劇場前広場の計画について広場の意義から論じた西成・斎藤（2004）によれば、石川は当時、「西欧広場で行われてきた社会的機能（市民交歓）は日本の商店街が従来行ってきた」（西成・斎藤2004：909）と考えていたことを明らかにしている。こうした商店街における市民交歓の機能を果たしてきたことは、国内における街路空間が果たしていた広場的役割の再検討を喚起する。市川（2001）は、以上のようなそれまで見過ごされがちだった、村落社会における広場的空間に焦点を当て、「人が集まり交換するための特定の空間」（市川2001：153）として広場の再定義を行った。人が集まるだけでなく、モノや情報などの交換という要素をも検討の対象とすることによって、広場という形態にとどまらない議論が可能になるだけでなく、地域社会のなかで人が集まる場がどのような意味をもち続けてきたのか、その検討の射程がより明らかになると考える。

### (3) 分析視角と方法：街路上の「体験」から劇場通りが果たした役割を考える

以上にみてきたような国内における劇場前空間の特性や商店街の果たしてきた広場的役割の議論をふまえたうえで、本稿では広場を「人が集まりモノや情報をやりとりする場」として劇場通りが果たした役割を明らかにする。そのための手段として、本稿では「盛り場＝出来事」とした吉見の視点（1987）や関（2007）によって提示された「五感的景観論」（関2007：229）を参照しつつ、街路をめぐる「体験」によって論じることで、劇場通りのもつ特性や役割を捉え直すことを試みる。

吉見（2007）は、「盛り場＝出来事」という論点を提示したことで、盛り場という場だけでなく、



「盛り場集まっている人びとの相互媒介的な身体性」そのものにも目を向ける必要性を示した。こうした論点の転換によって、劇場と劇場通りという点と線の空間的側面だけではない、人びとの体験によって街路を論じる可能性が生じてくる。景観論に感性からのアプローチを示したコルバンの議論を街路への応用可能性を示した関（2007）は次のように展望を示している。

「ある道ないし道路を「移動する」とき、その手段が徒歩や走り、自転車、バイク、自家用自動車、バス、車椅子などによって、目線の高さやスピードが異なるのは明白である。外界認知が視力に規定されるのは、ある意味で文化以前の生物学的基盤があるのを否定するのはむずかしい。一方で、移動するあるいは停止する際に、人びとは匂いや風や湿気の肌ざわりを感じ、音環境の変化（無変化）も同時に感じとるはずである。これらの要素を統合する『視座＝パースペクティブ』が得られたとき、景観論は立体的でダイナミックな段階に達することであろう」（関 2007：232）

以上のような関（2007）の論点は、一地点からのまなざしによって論じえない街路への検討アプローチを方向づけるものである。また、街路上の検討の視点として「移動の経験」に注目する必要性を喚起した鈴木（2007）の視座も、街路を通る者の主体性に注目している点で共通している。鈴木は道の移動のあり方に着目することで、「社会や時代を独自に映しうる媒体となりうる」（鈴木 2007：203）可能性を示唆している。こうした関の提示した「移動と視界の変化」ならびに「景観の五感的知覚現象」（関 2007：229）、そして鈴木「移動の経験」（鈴木 2007：203）の視座を深めるために本稿で注目するのは、劇場通りに向かう（あるいは通り抜ける）住まい、あきなうといった劇場通り上の人びとの行為や実践である。またそれらはしばしば、音やにおいの体験によって表出される。たとえば、劇場から通りに役者が宣伝にまわる「町回り」の太鼓によって、通りは一時的に須坂劇場のもつ非日常的な影響力を受けることとなる。しかし、筆者が聞き取りを行った昭和 30 年代、40 年代頃の聞き取りからは、太鼓の音について語りを書くことはなかった。かわりにトテ馬車のラッパや蹄鉄の音、おしろいやホルモン屋のにおいに紐づけられた劇場通りのにぎわいは、話者の記憶にあざやかに残っている。上記のような太鼓の音の消失、また特定の音やにおいが聞こえなくなることは、劇場通りの特性の変容を示しているものと考えられる。

本稿で取り上げる「劇場通り」（写真 1）は須坂駅から南東に 1 km、歩いて 15 分ほどの距離に位置する商店街である（図 1）。本上町（ほんかんまち）、上町（かんまち）、穀町（こくまち）の三つの町内を 500 メートルにわたって南北につないでいる。1914 年に建てられた須坂劇場は、1950 年に映画館「須坂映劇」に改称され、1977 年に閉鎖（写真 2）されるまで、須坂市の娯楽施設として機能していた。1990 年には、スーパーマーケットとして転用されるものの、数年で閉業を余儀なくされる。その後、長らく空き店舗だった芝居小屋は 2015 年に取り壊された。

当時の商店街を示すものは街路灯（写真 3）のみであり、宅地開発が進められている。劇場通りを東西に横切るように位置する泉小路は道幅が狭いためにかつて一方通行であった。そのため、緊急車両の通行や住民の安全確保のために長年拡幅の必要が訴えられてきたが、ついに 2020 年都市計画道路八町線が完成した。小路が小路でなくなったことは、経済的活動の面では利便性が向上した反面、



写真1 現在の「劇場通り」  
本上町（ほんかんまち）と上町（かんまち）の境界付近の様子。宅地開発が進められている。（2022年6月筆者撮影）



写真2 1977年に閉館した穀町の須坂劇場：1980年1月  
撮影（『須坂市史』1981：988より転載）

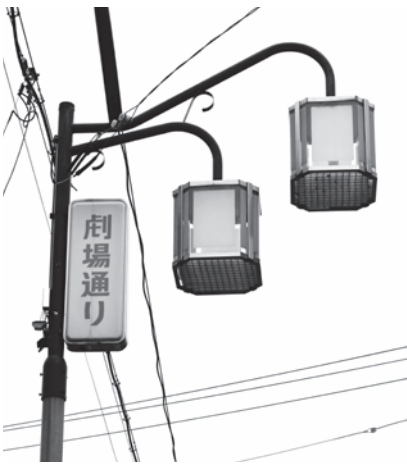


写真3 「劇場通り」の街路灯  
かつて「劇場通り」商店街を示していたアーチの門は老朽化のため取り壊されている。現在は街路灯の文字のみが「劇場通り」であることを示している。（2022年6月筆者撮影）

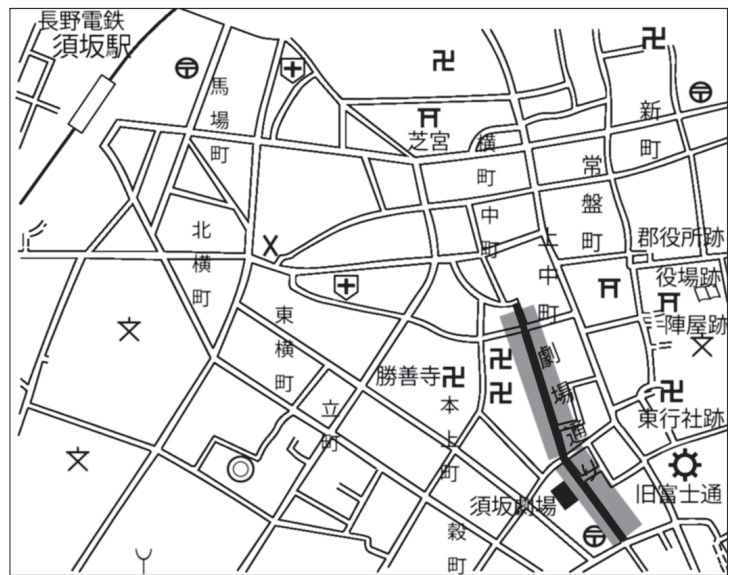


図1 現在の「須坂劇場」と「劇場通り」の位置  
（国土地理院地図をもとに筆者作成）

商店街としての心理的紐帯の見えづらさも多く語られる。<sup>(4)</sup>2023年1月現在、劇場通りが劇場通りであることを示すものは街路灯とその光のみである。

こうした劇場通りの変容は、須坂地域の生活変容を如実にあらわしている。本稿が劇場通りに注目する理由はこの点にある。劇場通りは60年前までは地域の人びとを集める空間として一貫して機能してきた。それではいかにして劇場通りは、人びとを集める通りとしてどのように生成され、どのような役割を果たしてきたのだろうか。劇場通りと須坂劇場については、製糸業の発展や、長野電鉄の延線などの外的要因が設立過程に大きな影響を果たしてきたことが指摘されてきた。

『須坂市史』や既往研究で既に明らかにされているように、須坂劇場はたしかに新しい文化を取り入れる玄関口の役割を果たしていたことは、松井須磨子や松本忠雄、そして美空ひばりといった名だたる公演歴を概観すれば明らかである。しかしながら「須坂劇場」の設立経緯やその目的については、残念ながら現存資料が確認されず判然としない。長野県下の劇場について詳細な調査を行った伊藤（1991）によれば「明治時代における最も大きな養蚕景気を背景として」設立されたことが示され

ているものの、設立目的や設立者については明らかにされていない。劇場通りについては、特に富士通須坂工場の撤退や人員削減が、影響を与えたことが指摘されてきた（亀川ほか2009）。以上のように、須坂劇場と劇場通りについては、発展過程についてそれぞれ検討はなされているものの、劇場通りがどのように形成され、いかに人を集めてきたのかについては未だ検討の余地が残されている。

本稿で紹介する語りは、2022年6月16日、7月2日、同月3日、2023年1月27日の4日間行った聞き取り調査によるものである。長野県須坂市の「劇場通り」商店街の商店経営者、ならびに須坂市内の周辺地域、隣町の小布施町に居住する60代から90代の商店経営者（旧経営者）17名の語りを再構成したものである。

- ・Aさん（食堂経営、1941年生まれ・男性）
- ・Bさん（金物屋を営業していたが現在は閉業、1941年生まれ・女性）
- ・Cさん（豆腐屋を営業していたが現在は閉業、1939年生まれ・男性）
- ・Dさん（美容室経営、1957年生まれ・女性）
- ・Eさん（酒屋経営、1954年生まれ・男性）
- ・Fさん（1935年生まれ・女性）
- ・Gさん（1944年生まれ・男性）
- ・Hさん（1947年生まれ・男性）
- ・Iさん（1969年生まれ・男性）
- ・Jさん（紙店経営、1947年生まれ・女性）
- ・Kさん（1931年生まれ・女性、小布施村から劇場で映画鑑賞）
- ・Lさん（1956年生まれ・女性）
- ・Mさん（1933年生まれ・男性、小布施村から劇場で映画鑑賞）
- ・Nさん（1949年生まれ・男性）
- ・Oさん（呉服店経営、1947年生まれ・女性）
- ・Pさん（1957年生まれ・男性）
- ・Qさん（1961年生まれ・男性）

以上の17名の劇場通りに住まい・あきなう人びとの語り、また対象地域の須坂とは離れた地域に居住しながらも、劇場通りを訪れていた人びとの異なる視点からの語りを検討することで、「通り」の歴史的空間性・連続性が明らかになると考える。

こうした劇場通りの語りを中心に、本稿では新道がどのような経緯のもとに劇場通りとして変容し、存続してきたのかを検討していく。本稿は、既往研究をふまえて本論文における劇場と商店街の分析視角を提示したうえで（はじめに）、調査地の概要を述べる（Ⅰ 「糸のまち」から「葎のまち」へ）。次に須坂劇場の設立から大正時代、昭和時代にかけての検討を行う（Ⅱ 劇場通りの形成過程）。そして、「Ⅲ 劇場から工場へと移りかわる劇場通りの求心性」では、戦後のテレビの普及等によって劇場の求心性が薄らぐなかで、工場への通勤路として変容していく過程を論じる。このような長野県須坂市の劇場通りの事例を通じて、広場的機能を果たしてきた劇場前の街路空間である劇場通



りの発展の歴史を論じていく。

## I 「糸のまち」から「蔵のまち」へ

### (1) 「蔵のまち」須坂の現在

本稿の対象とする長野県須坂市は、長野県北部に位置する(図2)。千曲川をはさんで長野市の東側に隣接し、町は百々川(どどかわ)(別名:市川)の扇状地にあたる。

須坂では1610年に堀直重の領地となって以来、明治維新まで堀氏が代々治める館町が形成された。現在も残る小路に、館町としての須坂の性格をみることができる。筆者が道に迷った際、市内在住の女性(60代)は、須坂は館町のために外からの敵が容易に侵入できないような迷路のようなつくりを残しているのだと語ってくれた。都市化が進み道路整備が間に合わないままに発展した須坂市内の町並みを生かし、「巨大迷路の町攻略マップ」<sup>(5)</sup>もつくられるほど、館町としての性格を残している。

1871年には須坂県から長野県へ移管され、1874年須坂町と改称される。1889年、町村制が施行され上高井郡須坂町となった。その後、製糸業の発展の過程で、地主や資産家によって、製糸工場の従業員住宅として長屋が多く建設され、現在でも須坂の町の特色のひとつとなっている。明治から昭和初期にかけて蚕糸業で繁栄した須坂の町は、戦後は電子工業で発展し続けた。現在はリンゴとブドウの産地としても知られている。

長野駅から須坂駅までは、長野電鉄で30分ほどの距離にある。長野電鉄須坂駅の車内アナウンスが「蔵のまち須坂」と流れるように町は現在、「蔵の町なみ」(写真4)が保存され、観光地整備が進められている状況にある。例年7月中旬にかけては、町の人びとに「芝宮」の名で親しまれている墨坂神社の祇園祭があり、町内を笠鉾が巡行する(写真5)。須坂市は市立博物館に加えて、笠鉾11基と屋台4台を保存展示する笠鉾会館や、市立博物館、須坂クラシック美術館、旧小田切家住宅、田中本家博物館等の文化施設を「まるごと博物館」とする「機能分散型博物館」の形態をとることで地域

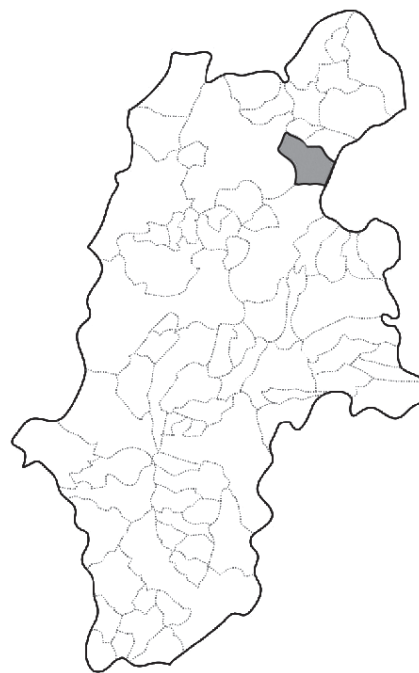


図2 須坂市の位置  
(国土地理院地図をもとに筆者作成)



写真4 「蔵の町なみ」(2022年8月30日筆者撮影)



写真5 祇園祭の笠鉾行列(2022年7月21日筆者撮影)



の人びとと協働で文化財保存活用を推進している。

## (2) 「糸のまち」須坂の形成

須坂の町は笹街道と谷街道の交差する交通の要地として善光寺参詣の旅人や商人でにぎわい、江戸方面からの物資や情報の往来する地として栄えた。百々川扇状地上に位置する町では落差を生かし、川の水を水車で動力として活用した綿商、穀商や油商の商いが古くからな<sup>(7)</sup>されていた。このような水車を動力とした商いが明治以後の須坂製糸の繁栄の素地となったことが今井（1932）の研究によって明らかにされている。小田切常三郎の談には、「須坂で製糸を始めるのは極めて容易である。裏川で水車を廻はして運轉の動車として、内に女子供の二三人もあれば、近在から繭を買つて来てすぐ始めることが出来る<sup>(8)</sup>」とあり、近くを流れる川の水の利を生かした製糸業の発展をみる事ができる。

横浜開港により生糸の需要が高まるにつれ、畑は麦や大豆の雑穀畑から桑園へと徐々に変化した。また、それまで手振による製糸が行われていたが、機械化は今井（1932）によれば、1860年に上町原田屋新兵衛が、前橋から座繰（ざくり）のための器械を購入し、須坂にもって帰ってきたことにはじまる。製糸法が器械による座繰に転換したことにより、生産性が高められ、幕末の須坂の町は養蚕が盛んになり、製糸家（糸師）が集まる地として発展した。

1872年、明治政府により官営富岡製糸場が設立され操業がはじまると、これら「模範工場」を視察した須坂の商人たちにより、水車動力を活用した器械製糸が須坂においても試みられるようになる。1874年には、青木甚九郎、遠藤万作らにより洋式製糸場が設立された。繰糸機の改良（ケンネル式）によって、糸に「より」をかけることができ、また水車によって糸枠を回転させることにより、工女の作業量は座繰に比べ減少<sup>(9)</sup>した。

翌年の1875年には、青木甚九郎、小田切武兵衛、遠藤万作らにより全国初となる製糸結社「東行社」が設立される。社名には、東の横浜へ、そして海を越えてアメリカなどの海外に販売を展開する意が示されているという。当初は製糸家10名による組織であったが、翌年には25名の共同販売組織にまで成長した。製糸方法や工女の賃金などの協定を定めるなど、生糸の品質を統一するための画期的な運営を行った。1878年には、共同揚返所が設置され、販売だけでなく生産面においても共同化が行われるようになり優良な生糸を横浜の生糸問屋に出荷するための共同揚返しが行われるようになった<sup>(10)</sup>。のちに東行社からの脱退者によって結成された俊明社と東行社、両社の競争、協調関係により須坂の製糸業は大正時代にかけて飛躍的に成長を遂げる事となる。

工場は大規模化し、1912年の上高井郡の器械製糸工場の数は釜数6,179、生産高7万7千貫の生産高を数えた。翌年の1913年には製糸業に従事する工女の数も6,542名に達<sup>(11)</sup>している。しかしながら製糸業は「生死業」とよばれるほど、常に時代の波に翻弄され続けていた。1914年と1920年の恐慌により、多くの製糸家が糸価の変動に翻弄され廃業を余儀なくされた。このような製糸業者は大倉製糸、片倉組や山丸組など全国的な大規模の企業に吸収される事となる。しかし、1930年から翌年にかけての昭和恐慌によって須坂における製糸業は急激に衰退し、戦時中には、製糸業の工場などの施設は軍事用の疎開工場として引き継がれ、工女も疎開工場での新たな軍事用作業に従事する。疎開してきた富士通信機を中心とした工場は戦後須坂に残り、電子機械部品・組立工業の地として知られるようになった。以上の調査地概要および製糸業略史を踏まえ、次節からは本稿の検討対象とする劇場

通りの形成過程について検討していく。

## II 劇場通りの形成過程

### (1) 道をひらく：おしろいのおいの穀町新道

須坂市内に住むGさん（1944年生まれ）、Hさん（1947年生まれ）は、「駅からドキョウのおい、あがってくるとおしろいのおい」という言い回しを伝え聞いている。「ドキョウ」は、須坂地方の方言で、「さなぎ」を意味する。こうした言い回しは大正時代にかけての劇場通り周辺の繁栄ぶりを示すものと推察される。本章ではこのような「おい」の想起から、新道から劇場通りとよばれるようになるまでを概観する。

近代須坂の発展には、水の利を生かした須坂商人たちの経済基盤と協働的な運営を行ってきた相互扶助の精神性がその土壌にあった。1888年、軽井沢・直江津間の信越本線が開通し、その5年後には、豊野駅や長野駅に全線開通をみた。そのため、須坂地域は豊野駅が陸運輸送の玄関口となり、須坂・豊野間の交通網の整備の必要性が高まることとなる。同時期の須坂の人びとは、須坂から豊野に向かうには、1889年に開設された小布施村の有料道路である新道を通る必要があったのである。それから3年後の1892年、穀町新道が開設された。この道がのちの劇場通りとよばれることとなる。

1892年に新たに開設された穀町新道は、交通網の変化により、料理屋が立ち並ぶ通りへと変容していく。1898年9月に吉田駅（現 北長野駅）が開設されると、小布施村から豊野駅に向かうのに比べ、長野方面への迂回路となるために、吉田駅を起点とした交通網の整備が急がれることとなる。実現に至らなかったものの、1900年1月には、「須坂馬車鉄道」の設立が目指されており、発起人のほとんどは製糸業者が占めていた。<sup>(12)</sup> このことから、横浜方面への効率的な生糸の出荷ルートが模索されていたことがうかがえる。1901年の『長野県芸妓取締規則』によれば、定められた居住地に芸妓を居住させることが規定されており、須坂町の「芸妓居住地域」として上町、勝善寺新道のほか穀町新道の三か所が選定されている。<sup>(13)</sup> 1904年には、「須坂料芸組合」が設立され、芸妓の数は60余名を数えている。<sup>(14)</sup> こうした取り締まりに、私たちは前に述べたような芝居町の形成と同じ志向性をみることができよう。旧来からの館町時代からの街路に比べて、空き地の目立つ新道は娯楽空間の形成に適していた。「芸妓居住地域」は、空間的にみれば芝居町と同様の性質を有していると考えられる。新道は娯楽施設である料理屋街というだけでなく、芸妓の生活空間として形成されていく過程をみることができよう。

### (2) 須坂劇場の果たした公会堂的役割

前章でみてきたように、須坂の町は明治から大正、戦前にかけては製糸の町として知られ、戦中は製糸工業の設備環境と労働資源を引き継いだ軍需工場（富士通）として、そして戦後は電子工業の集積地として発展した。製糸業が盛んだった地方劇場の多くは、「工女の慰安のために」設立されたという説明がなされる傾向にある。<sup>(15)</sup> たしかに、須坂劇場開場初日には「東行社六工場の工女千餘名」が鑑賞に詰めかけている。<sup>(16)</sup> 開場初日に来場する工女の団体客である。大正時代の地図からもうかがえるように東行社から劇場まではほど近く、劇場設立者のほとんどが東行社関係者を占めていることを鑑

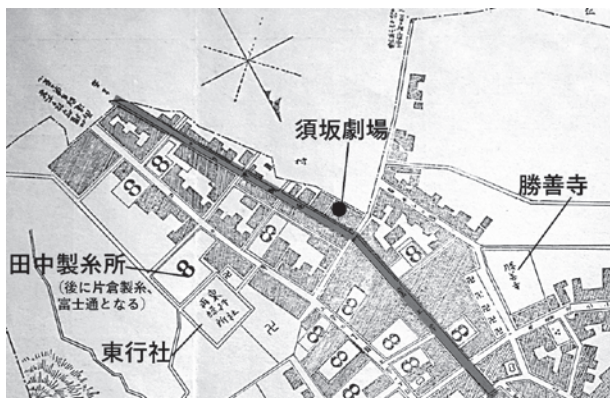


写真6 「長野県上高井郡須坂町全景」1917年12月(部分)  
 図中8は製糸所を示している。地図中に劇場等の位置を推定し、主要な建物の位置関係を示したほか太線強調部分で現在の劇場通りを示した。現在の劇場通りは「コク町新道」と記されている。



写真7 「須坂劇場開演の光景」  
 (『須坂商店案内』1928年より転載)

みれば、製糸工場で働く工女の慰安が設立目的のひとつにあったのではないだろうか。しかし本当にそれだけの目的だったのだろうか。本項からは、須坂劇場開場計画にはどのような背景があり、どのような設立の目的があったのかについて、開場に着目し分析を進めていく。

1914年12月1日、穀町新道に須坂劇場が開場した(写真6)。和洋折衷の左右対称2階建ての木造建築である(写真7)。建築面積170坪、延床面積210坪、145畳の畳敷で定員は750名の規模であった。<sup>(17)</sup> 開場当日の報道によれば「東都歌舞伎座型」の建築様式が採用されたことを伝えている。<sup>(18)</sup>

須坂劇場の運営には、株式会社としての運営方式が採用された。1914年3月18日、浦野安井・牧熊吉・牧六郎右衛郎・高澤五兵衛・清水伊作・根津半兵衛・片桐菊蔵・田中邦治8名が料亭『松ヶ枝』に集まり、「須坂劇場株式会社」の株式募集や劇場建築についての取り決めを行った。<sup>(19)</sup> 須坂劇場の設立者のほとんどを東行社系の須坂商人が占める。<sup>(20)</sup> 須坂商人たちと、大正初期に至るまでの生糸産業による商業的基盤によって、須坂劇場の運営は支えられていた。当時、『北信新報』須坂支局長であった鈴木與喜治は、5月21日の日記の項に以下のように記している。

「今夜須坂劇場株式会社発企人ヨリ松ヶ枝ニ招載セラレ居リシガ来テ呉レト迎ヒ来リシ故八時ヨリ行ク同業ノ田中、山岸、伊藤、立川君アリ外ニ山下町長、牧邦、牧熊氏ノミヤガテ杯宴ニテ種々計画ノ話シアリ十時半帰り辞シ帰宅シ予ハ之ヲ記ス」(『鈴木與喜治日記』1914年5月21日)

こうした鈴木の日記をみていくと、1914年5月から、劇場設置に向けての計画は新道に位置していた料理屋「松ヶ枝」に山下町長をはじめ須坂商人たちが集まり協議のうえで進められていたことがわかる。そして株式会社を協働で運営する須坂商人たちの連帯は、日本初の製糸結社、東行社の「共同揚返し」をはじめとする組織によって醸成されていた。調査地概況の章で前述したように、東行社は、須坂のいくつかの製糸所が結社として生糸の共同販売を行うために1875年に創立された。はじめ共同販売のみの組織であったが、1878年には、共同の揚棒所を設け品質の統一化を図った。その一方で、工場法以前の工女の労働環境の整備は途上であった。製糸業は7月から10月位までの限定



的な労働であった。そのために、作業効率と工女の娯楽を関連づけるような志はなかったのである。1888年に制定された、長野県の『工男女使傭規程』第17項は「各工場に於ては就業中放歌雑談を禁じ専ら工男女の品行を順正ならしむべし」、第18項「就業時間外と雖も可成工女の外出を止め裁縫及び習字等を授け傍ら平易の修身を談じ努めて婦徳を涵養すべし但し運動の際は風俗上害なき遊戯を為させむべし<sup>(21)</sup>」とある。このように、工場法施行以前の日本では、明治初期の工女の娯楽はむしろ制限し、風紀を取り締まる方向に義務付けられていた。明治末頃の須坂地域の製糸工女の労働時間はすべての工場が12時間から15時間という、きわめて長時間に及んでいた<sup>(22)</sup>。

須坂の東行社においても、明治末頃までは、年4回の休み（明治節、太子祭、えびす講、御祭礼）の半日休みしかなかったことが指摘されている<sup>(23)</sup>。工女の休みには「休みせえばただおえべっさん（恵比寿講）と御祭礼に半日づつあっただけ<sup>(24)</sup>」であった。しかし、各地の製糸工場において次第に作業日数が増加するなかで、「工女慰安」の意識が生まれるようになる。1916年に施行された「工場法」<sup>(25)</sup>（1911年3月制定）により、1か月に2日は休日が設けられるようになり、工女の娯楽は大正初期から遠足や観劇にみられるようにゆるやかに整備されていくこととなる。

こうした製糸業がもつ協働的性格は、須坂の町の景観に大きく影響を及ぼしていく。須坂劇場もこうした明治末頃からの製糸家による協働的なインフラ整備の動きのなかに位置付けることができるだろう。明治末になると、東行社が私設電話を周辺地域に先駆けて1896年に設置、1907年には公設電話が設置される<sup>(26)</sup>。1904年には越寿三郎により須坂町に電気供給が開始されるようになる。また、1903年には葦沢義定、青木甚九郎ら有志により、須坂図書館（後の市立須坂図書館）が開館<sup>(27)</sup>、1907年には、「穀町倶楽部」（現 穀町公会堂）が創設されるなど、明治末頃の製糸家たちの相互補助のつながりは経済面だけでなく文化面においてもみられる。

明治末頃から大正初期にかけて須坂町は郡政の中心地だった。新聞記事で開催場所が明記されている須坂町内での演説会の記録をたどると、料亭から寺、劇場へと集会の開催場所が変化していることがわかる。

長門座は、演劇場「墨坂亭」が開設された1895年頃同時期に開かれたとされる（『須坂市史』1981）。1902年には、花園壽三郎、山岸磯治、小林保治、小林半左衛門によって合資会社として設立されたことが官報にみえる。上高井郡の政治活動の中心として盛んに利用されたものの、設立登記に記されている「本店」住所に「上高井郡豊丘村五百五十五番地」とあることから、上高井郡役所があった常盤町（須坂町中心部）からは離れた位置にあった。長門座合資会社は1907年1月20日に解散したために、新たな劇場が必要となった。また演説会が盛会になるにつれ、大人数で集まることのできる空間が郡役所の近くに必要になったと考えられる。こうして選定された穀町新道は、須坂劇場の発展によって次第に劇場通りとよばれるようになった。

こうした料理屋街を形成していた新道は、1914年に須坂劇場が開場したことによって、明治期に建てられた家が並ぶ表町通りとは異なり昭和初期に至っても空き地が残る状態であった。『穀町区誌』に収録されている遠藤利男さんの回想記に、劇場通りとよばれる以前の新道の様子が次のように描写されている。

大正末期より昭和の初期、私の家のある街通り（今は「穀町」通称「劇場通り」で名は通ってい



る)は西穀町と呼ばれていました。本来の穀町は江戸時代からあった現在国道四〇六号線であり、当時、町内では穀町を「表町」、西穀町を「新道」と呼び合っていました。従って当時の家並みも、表町通りは江戸期、明治期に建築された立派な家屋が整然と立ち並び、往時の穀町の象徴を現しておりました。一方新道通りはその名の如く所々に空地が残っている状態でした。(穀町区 1993: 7)

回想記からは、昭和初期に至るまで、新道は空き地が残る新しい道の面影を残していたことがわかる。そのような空き地の残る新道はどのような商店街を形成し、どのような役割を果たしてきたのだろうか。次節からは新道で商業を営み、暮らす人びとの語りに注目し、大正末期以降の劇場通りの発展過程を検討する。

### (3) トテ馬車と太鼓の音

劇場通りに向かうのは、仕事終わりの工女たちだけではない。蚕糸業が全盛をむかえていた大正時代の劇場通りは、蚕糸業の商人や作業員、行商人、芸者、通りで暮らす人びとなど、さまざまな人びとが往来する通りだった。

須坂劇場の近くには大正時代に乗合馬車「トテ馬車」(写真8)の発着場があったという。1921年、河東鉄道の須坂・屋代間の営業が開始されるものの、馬は依然、生活に欠かせないものであった。



写真8 トテ馬車 (『写真集：須坂・小布施・高山・若穂百年史』72頁より)

蹄鉄といいまして、むかしは牛や馬、農耕馬がさかんで、足のところに蹄鉄といいまして、その鍛冶屋さんがあったんだ。この辺にね、トテ馬車の、発着所があったんです、トテ馬車、これはね、中野行きとか、豊野までいったり、山田温泉とか湯田中もいったんだね、ほんとうに賑やかだったんだよ、芸者さんもたくさんおられましてね、料理屋さんもあったんだよ。(2022年7月2日、Cさんの語りから)

1939年生まれのCさんの家が営む豆腐店の近くには、大正時代にはトテ馬車の発着所があった。製糸業の商談にやってきた横浜方面からの客を、劇場通りの料理屋で接待し、乗合馬車「トテ馬車」<sup>(28)</sup>に客をのせて山田温泉や湯田中温泉などの観光を斡旋したと伝えられている。

回想記を記した春原さんによれば、太鼓の軽い音が聞こえてくると、子どもたちは表通りへ飛び出したという。少し長い引用となるが、「町回り」の様子について詳細に記しているために、以下に紹介する。

行列は市川牡丹大一座などと染めぬいた六尺余の幟の旗竿を担いだ少年達が十人程列になって先

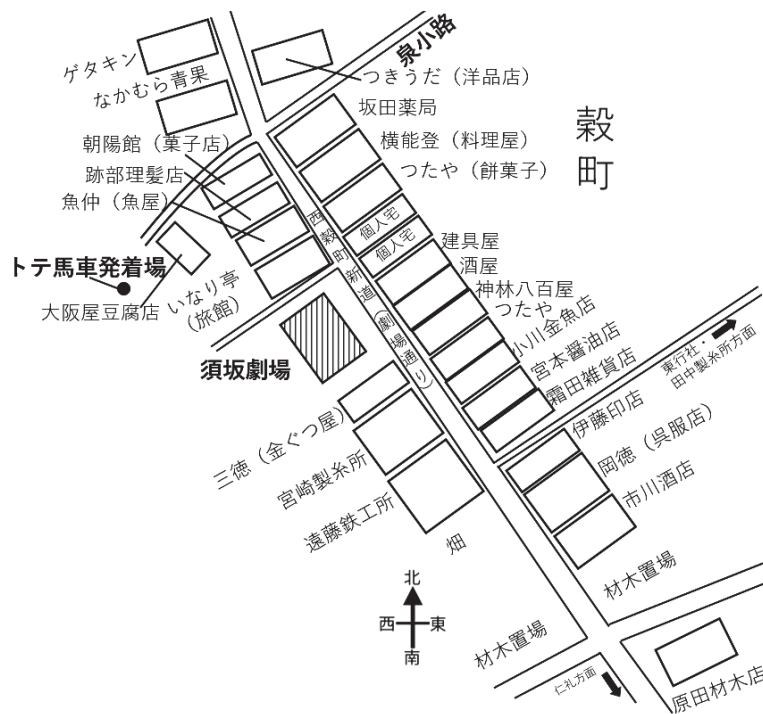


図3 大正末頃から昭和初期の劇場通り（穀町側）（『穀町区誌』と聞き取りをもとに筆者作成）

に歩いてきます。それは大体近所の顔見知りの五年生か六年生のお兄いちゃん達です。その後から人力車に乗った法被のおじさんが太鼓をたたき、次の人力車にはお化粧をしたお姫様、その次は丁髷の役者さんの車と三〜四台続きます。四つ角へ来ると止まって法被のおじさんが、「東西東西お馴染み市川牡丹大一座！ 今宵相つとめますは与話情浮名横櫛」などと長々口上を述べ「にぎにぎしく御来場願ひ上げ奉ります」と言いながら、また、太鼓をひとしきりたたいて去って行きます。市川牡丹という一座はしょっちゅう来ました。人々は町の噂で宗十郎が来る、何のお芝居が来るとみな知っていた様でした。多くは旅回りの一座だったのだと思います。（春原1990：102）

戦前の町回りの様子が細かく記されている。こうした町回りの行列は劇場通りを生活空間としての街路から劇場前の「劇場通り」たる街路として変容させていた。

図3、図4に、劇場通りの商店配置図を示す。劇場に近い上町から穀町にかけては、菓子店や洋品店が、横町に比べ多い傾向にある（図3）。一方、上中町方面は料理屋が集中する（図4）。劇場通りについては、工女向けの商店が繁盛した可能性が指摘されてきた。実際、1920年の須坂町の人口調査は、女性の総数が男性を大きく上回る結果となった（男5,112、女9,897）。『須坂市誌』（2016）は、準世帯（学校や工場寄宿舎、病院や下宿屋）数上の1対8の男女比に注目している。準世帯女性数5,052人のうち4,998人が15歳から25歳の工女たちであり、15歳から20歳の年齢層が最も多くを占めていた。<sup>(30)</sup> このことからもしかには工女向けの商売が繁盛していた可能性が示唆される。製糸所で働く工女に加え、劇場が人びとを引きつけるようになったことに気がついた須坂商人たちは、劇場に引き寄せられる人びとを主な購買層として想定した新たな商いへと柔軟に転向した。

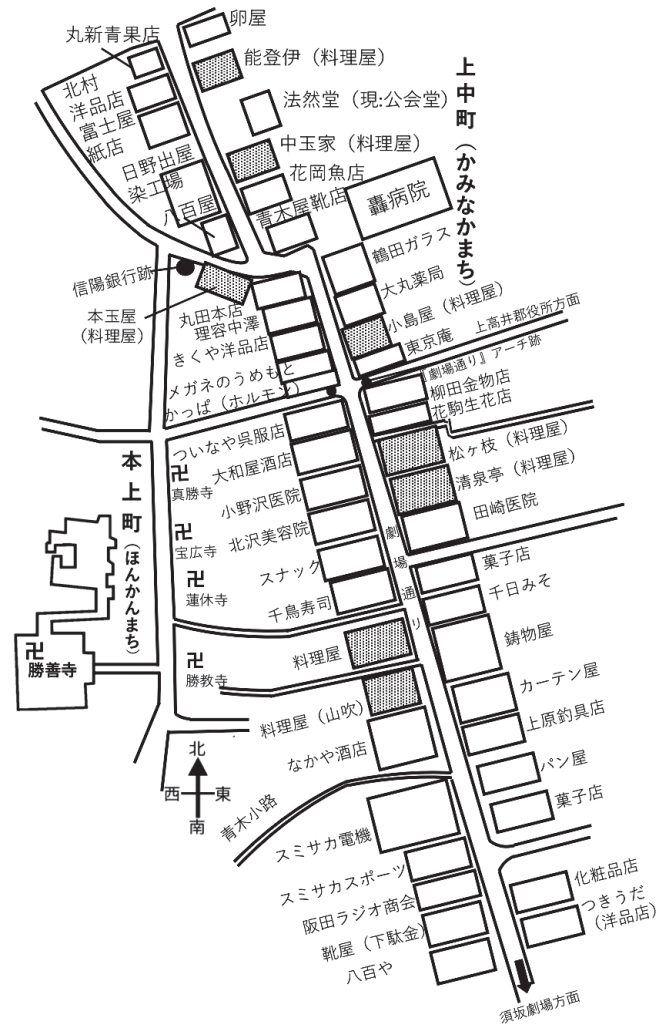


図4 昭和40年代の劇場通り：上中町から本上町方面（1969年都市計画図と聞き取りをもとに筆者作成）

- 北沢美容室（1891年創業・元 肥料商）
- 富士屋紙店（明治末頃創業・元 製糸業）
- 東京庵（関東大震災後に東京から転入）
- 大阪屋豆腐店（1930年頃・元 製糸業）

東京庵は1892年に東京で蕎麦屋として開業した先々代が、関東大震災後に故郷の須坂に戻り、開業したことにはじまる。現在も食堂として、変わらず同じ場所で営業を続けている。Aさんの父（1909年生まれ）は、須坂劇場で無声映画を上映する際は、劇場でヴァイオリンを弾いていた。大正初め頃から劇場通りで食堂を開業したことは、当時から飲食店の需要があったことを示している。戦前の須坂劇場の運営は、製糸家による株式会社期（大正初期-昭和初期）、田中邦治氏経営期（笹岡氏による運営・昭和初期-戦前）、牧隆炳氏経営期（篠井劇場と同経営・戦中）の三期に分けられる。

戦後まもなくの須坂劇場は、石浪興行社の池田邦芳氏により経営されるようになる。その後市川公雄氏に経営が引き継がれ、昭和22年に須坂劇場は、須坂映画劇場とよばれるようになった。1950年に場内を一部改装、映画の上映が可能となり須坂劇場もこの頃「須坂映劇」へ改称されたとされる。

「映劇」となったことで、映画館として大きく変容した劇場は、「映画の殿堂」として多くの人びと

を引きつけた。1931年生まれの小布施町のKさんは、「須坂映劇にはみんなで見に行く」ものだと語る。「オーケストラの少女」を小学校の団体鑑賞で見に行った記憶を、劇中歌を歌うことができるほど、鮮明に記憶している。また小布施町のMさん（1933年生まれ）は、商業高校時代は友人と月に2、3回、卒業後は仕事の合間に見に行ったという。Nさん（1949年生まれ）は、子ども時代は親と、須坂高校時代は友人と映画を見に通っていた。またLさん（1956年生まれ）は、高校生の頃学校の団体鑑賞で見に行ったという。このように、須坂町に学校が集中していることで、団体鑑賞や放課後の娯楽として、須坂劇場は子どもたちを引きつけていた。

### Ⅲ 劇場から工場へと移りかわる劇場通りの求心性

#### (1) テレビの普及と劇場数の増加による劇場通りの性質のゆらぎ

テレビの普及によって、須坂劇場への求心力は低下していく。信濃毎日新聞や『須坂市史』でも須坂市内の劇場の閉館の理由としてテレビの普及が挙げられているが、聞き取りからも、その傾向がうかがえる。Bさん（1941年生まれ）の語りからは、1953年頃の受信の不安定さが「天ぷらを揚げる光景」として表現される。

テレビなんて見たのは、小学校5・6年頃、昭和28年ごろか、休みの10分間のさ、各町に、農協あったんだよ、農業組合って言ってね、えーなんだそれ、テレビジョンだってどんなもんかや見に行ってみよう、そしたらジャガジャガ、こんなもんだよ（両手を上下にふりながら）、陽が当たって、よく見えないでしょ、天ぷらやってるみたいだよ、においはしないよな、ふうんなんて見てるうちに、先生来てはしねえか、授業始まっちゃうって、また見に行こうって、小学校の教室にとんで行った。……（中略）……えー天ぷらやってるもんかな、音はするけれど、においはしねえもんなあ、天ぷらやってるんかな、そんなんやってるテレビだったよ。（2022年7月3日、Bさんの語りから）

このようにBさんにとってのテレビは、天ぷらを揚げる光景と紐づけられている。それまで見たことのなかったテレビを見た体験が、日常の天ぷらの調理風景と紐づけられている点は技術製品の普及を考えるうえで興味深い。テレビは、須坂では家庭に急速に普及をみせた。須坂市内の当時のテレビ（白黒）普及率は、1960年には、60パーセント、1962年には78.4パーセントと急速に増加している。<sup>(32)</sup>Fさん（1935年生まれ）は松代から23歳のとき須坂に嫁いできた。20代の若い頃、よく須坂劇場に映画を見に行き、よく東京庵でラーメンを食べて帰っていた。テレビが家に入ってきたのは、1962年、それまでの23歳から26歳くらいまではひとりでも須坂映劇によく通っていたという。テレビが家に入ってきたことは今でも鮮明に覚えていると語る。

夫は公務員、給金は1万5、6千円くらいだったから、月給がだいたい4、5千円の時代、余裕はあった方だと思います。『もう映画行かないでテレビ入れるか』といった主人の言葉を覚えていきますよ。（2022年8月9日、Fさんの語りから）



映画館に行かずにテレビを入れるという表現からも、テレビの普及が須坂映劇に与えた影響は大きかったことが推察される。もはや劇場に行くことなく、家庭や通りで映像を楽しむことができるようになった。街頭テレビは1955年頃、劇場通りにも設置され、午後6時から9時にかけて放映されていた。<sup>(33)</sup>夕方から3時間に限り放映される街頭テレビは、夕方以降の劇場通りのにぎわいを示すだけでなく、須坂劇場へ向かう意義のゆらぎを生じさせるものであった。当時、須坂市内には須坂劇場を含めて4館の映画館が存在していたうえに、テレビの普及は持続的運営を困難にするものだった。

Nさんによれば、50年前の劇場通りについて、「日中は人の往来は少ないけれども、土日は映画を上映していた」ことを記憶している。こうした街頭テレビの放映は日中から夕方への劇場通りの性質の変容を示している。次項では、富士通須坂工場に着目して検討する。

## (2) なぜ劇場通りは人を集めていたのか

穀町の田中製糸所の工場や工女たちといった労働力は、片倉製糸、富士通信機へと絶えず連続して引き継がれていく。そのために本来「裏通り」であった劇場通りは、出勤・退勤時間になると通勤路として利用され続けていた。1942年、富士通信機製造株式会社が、敷地建物延べ7,754坪、および製糸業専用の機械類を除く備品の買収、そして片倉は従業員を引き続き富士通信機工場勤務させるように努力する等の契約締結によって、片倉製糸を買収し操業を開始した。信濃毎日新聞に「つい一月前まで糸を繰つてゐた乙女がハンマーを持ちドライバーを操作する<sup>(34)</sup>」とあるように、工女たち従業員や建物はそのまま引き継がれ、電話機や通信機の製造が開始された。<sup>(35)</sup>このような完全転換によって、劇場通りの発展は維持されることとなる。亀川ら(2009)の調査によって、劇場通りは「富士通須坂工場」社員の通勤経路として機能していたために、オイルショック・工場規模縮小による人員削減の時期と1990年代から店舗の閉業が顕著にみられることが指摘されている。本節では、富士通須坂工場の劇場通りへの影響について論じていく。

宮沢(1984)が指摘しているように、1956年時点の須坂工場の従業員は男性200人に対し、女性は350人であり製糸工場の工女的性格を受け継ぐように女性の労働力に依拠していた。しかし、通勤形態は寄宿舎から通勤へとその形態は移行している。当時の須坂市内からの通勤者は72.8パーセントを占め、ほとんどが通勤だった。<sup>(36)</sup>1966年、富士通は長野工場をコンピューターの完成品組立工場とし、須坂工場は電子部品の専門工場となり、須坂工場は一時3,000人を超える巨大工場として変貌を遂げていた。<sup>(37)</sup>

昭和40年代以降の劇場通りについて、富士通須坂工場に勤めていた人びとや劇場通りに住まい・あきなう人びとの語りのなかに、「ホルモン屋のにおい」はたびたび登場する。Eさん(1954年生まれ)によれば、料理屋の女主人が京城から引き揚げて姉妹で営んでいたもので、「2杯のんだら帰る」という独特のルールであった。ホルモン屋はそれまでの劇場通りではみられない業種であり、戦後の劇場通りの意味づけの変容を示している。他にも新たな業種として、スポーツ用品店やスナックなどが挙げられる。スポーツ用品店でスキー用品やグローブをよく買いに行ったというPさん(1957年生まれ)は、「スキーはこのあたりではいろんなところに行けるんです。飯縄方面、北に行けば竜王、志賀高原、菅平」と語る。劇場通りに隣接する本町通りは古くは大笹街道、現在は須坂菅平線とよばれ菅平方面に抜けることができる。こうしたスキーの語りは自動車の普及と不可分の関係にある。

こうした劇場通りの語りから、自動車普及との関連性をみていくと、子どもたちの遊び場といった語りの場においても自動車の影響無しには語るができないだろう。前述のように、大正末期から昭和初期にかけて、劇場通りは表町通りと比べ、「その名の如く所々に空地が残っている」状態であった。そのために、劇場通りは子どもたちの遊び場でもあった。

ここには太い材木がうず高く積んであり「かくれんぼ」「鬼ごっこ」など遊びに利用したものです。又、今のように自動車の往来もなく、せいぜい荷馬車、荷車程度の交通状態だったので、道路も遊び場の一部になり、エネルギーを十分発散することができました。今一つは、私の家の前が道路に面して僅か広場になっておりましたので、この広場と道路を含めて運動場にして「ベースボール」実は三角ベースをしたものです。(穀町区 1993:7)

以上のように劇場通りに暮らす子どもたちは通りを遊び場に使っていた。昭和40年代においても、一貫して劇場通りで遊んでいたという語りもみられる。Qさん(1961年生まれ)によれば、小さい頃は車の往来が少なく、近所のお姉さんと商店街のアーチの柱に綱をわたしてバドミントンをしていたという。どちらも共通しているのは、自動車の往来が高度経済成長期以降の劇場通りの性質に影響を与えていたということである。子どもたちは、新道ならではの空き地と、通りの特性を生かし、遊び場として劇場通りを利用していた。こうした語りは、劇場通りが自動車交通量の多い本町通りの影響を受けて安全地帯として機能していたことを浮き上がらせる。昭和50年以降、交通緩和のために道路交通網の整備が進められていくなかで、工場が位置していた本町通り(須坂菅平線:旧大笹街道)の自動車利用量は著しく増加した。<sup>(38)</sup>Dさん(1957年生まれ)は、「富士通の人たちが帰るのは5時から6時くらいで、本町通り沿いに歩く人と、劇場通りを歩く人と2通りいた」と語る。Jさん(1947年生まれ)も、「富士通は3交代くらいじゃないか。そんなに暗くないうちに帰っていく」と語る。Nさん(1949年生まれ)は、1973年から2000年まで富士通開発部に勤務していた。富士通前の本町通りは車がよく通るので、退勤後は泉小路に入り劇場通りを歩いて須坂駅に向かったという。実際、富士通に勤めていたLさん(1956年生まれ)の語りからは、「富士通」勤務当時、帰宅時に劇場通りを歩いて帰る人が多かったことがわかる。Lさんの父も富士通に勤務しており、トラックで部品を運送する発送に従事していた。Lさんは設計課の「キーボードプロジェクト」に3年勤務していたが結婚を機に退職した。「宴会は劇場通り近くの寿司屋「千代菊」に行くことが多かった」、「みんな帰りに喫茶店行ったり、食事行ったり、食べに行ったり、盛進堂(和菓子屋)の2階にも行った」と回想する。

こうした富士通須坂工場に勤めていた人びとの語りからは、高度経済成長期以降の劇場通りが自動車の往来を避けるための迂回路であり、安全地帯として機能していたといえる(図5)。自動車交通量の少ない劇場通りは、歩行者にとっては安心して通行できる商店街であった。富士通須坂工場の規模縮小、そして閉鎖は、通勤のために歩く人びとの集団を消失させ、劇場通りそのものの性質を大きく変容させることとなる。

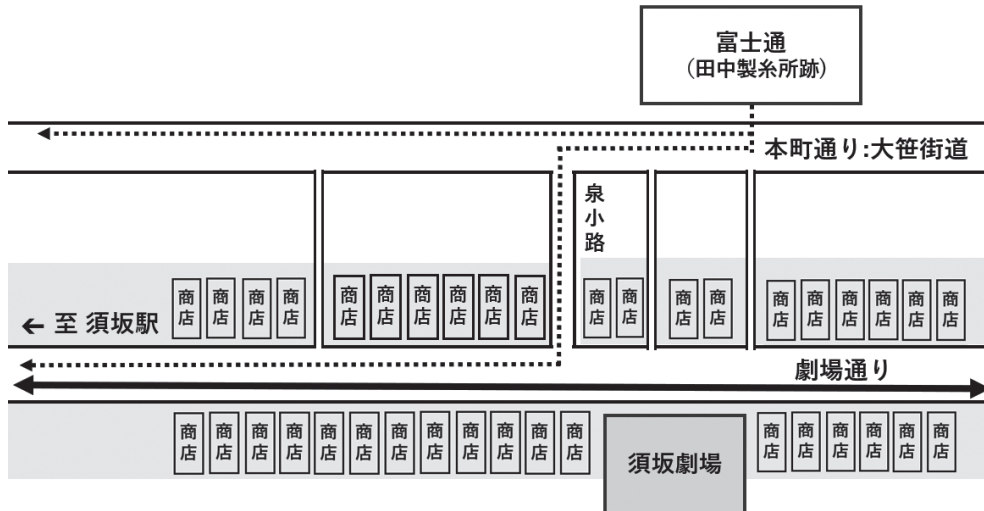


図5 劇場通りの安全地帯化：本町通りとの相互作用性

富士通須坂工場に勤務する人びとは、本町通りか劇場通りを通勤時に通り抜けていた。本町通りから泉小路などの小路を抜けて劇場通りを通っていた。高度経済成長期以降、自動車の交通量が激しい本町通り（須坂菅平線）に比べ、劇場通りは交通量が少なく歩行者にとっての安全地帯として機能していた。

## おわりに

本稿の目的は、日本における「劇場通り」の特性を整理したうえで、長野県須坂市の劇場通りを事例に、新道がどのような経緯のもとに劇場通りとして確立し、変容し、そして存続してきたのかを明らかにすることにあつた。そこで本稿では劇場通りを音やにおいなどの五感に紐づけられる体験によって論じることで、これまで分析の射程とされてこなかった劇場前の街路の性質とその変容について論じてきた。

日本においては劇場建築のみを輸入したために、劇場前に形成された商店街といった街路空間が劇場前広場の機能性を代替してきたと考える。本稿では、「人が集まりモノや情報をやりとりする場」として広場を定義し、劇場前の街路空間が果たした機能性についての検討を試みた。須坂劇場の設立目的については、信濃毎日新聞および、須坂市文書館蔵の鈴木與喜治日記の分析から検討を行った。須坂劇場は、製糸家の有志らによって公会堂的意味づけのもと設立されたことを明らかにした。戦後の須坂劇場はテレビの普及や劇場数の増加により、須坂劇場は時代の変遷とともに衰退を余儀なくされ、その求心性は徐々に薄らいでいく。一方で、近接する製糸工場の経営は田中製糸から片倉製糸へと移行するものの、1879年から雇用を維持し続けた。1942年の片倉製糸から富士通須坂工場への転換以降も、一定の雇用を明治以来持続的に維持し、それは須坂劇場の開場から60年にわたって続いた。ここに私たちは、新道における求心性が劇場から製糸工場、そして富士通信機工場へと移行する流れをみるができる。一方、劇場通りの求心性が、劇場から製糸工場、そして富士通信機工場へと移行するに伴い、劇場通りとそれに沿った商店街の変化も散見される。たとえば、スポーツ用品店やホルモン店、スナックなど、一部には散見されるが、古くからの商店の多くはその姿を維持し続けた。ここに筆者は、日本における劇場通りの発展と変容をみるができる。劇場通りはその象徴である劇場を失いつつも、新たな求心力である工場を得て60年間劇場通りの名を残しつつ、広場的街路空間としての機能を維持し続けたのである。

## 謝辞

本研究は多くの方のあたたかいご協力とご教示がなければ実現しませんでした。

本稿の執筆にあたり、貴重な体験を語ってくださいました皆様、関係各位に心より感謝申し上げます。

(以下五十音順)

青木様	石田様	岩崎こずえ様
岩崎しのぶ様	上野重明様・奥様	岡田芳江様
小布施町立図書館様	川口尚樹様	北沢様
木村様	小池寧々様	小泉様
須坂市文書館 中澤様	須坂市役所まちづくり課の皆様	須坂市立須坂図書館様
塚原勳造様・奥様	土屋味噌醤油醸造場様	長野市立長野図書館様
中村紀子様	夏目様	ホルモン焼みのり様
牧雅子様	水野様	

末筆ながら本稿の改訂にあたり、あたたかいご指摘を頂いた査読者に心から感謝申し上げます。

## 注

- (1) 劇場前の街路空間は本稿の論じる劇場通りは「劇場街」として包括して論じられてきた。劇場街は、興行制度の確立による劇場の常設化によりもたらされたものであり(守屋 1985: 54)、そのような劇場の成長度合いを示すものとしての解釈がなされてきた(中西 1985: 107-108)。このような劇場をとりまく街路への解釈は、芝居小屋が常設化される 17 世紀末の劇場の発展を示す副次的存在としての理解を示している。
- (2) 近藤瑞男「芝居町」『歌舞伎事典』平凡社
- (3) また、横浜滞在中モラエスが劇場通りに魅力を感じ何度も訪れていた描写は、劇場通りの広場的街路空間を示唆している。「ぼくがよく行つたのは劇場街だつた。ぼくはそこに入り、その附近の小路の迷路に入つた、そして特に、日本の國の珍しい風習、その珍しい商品、見栄を張つた小店、小さい家並、それから何よりも優しいこの日本の特質—日本の女—に親しい瞳を注いだ」(モラエス 1941: 200) ここでいう劇場街は直線状にのびる通り「劇場通り」の特性を指しているものと理解できる。直線的な通りから分岐するように時折小路があるという劇場通りの性質は、本稿で取り上げる須坂においても共通する。
- (4) 泉小路が小路でなくなったことについて、D さん(1957 年生まれ)は、「商店街のつながりが分かれてしまつて見えづらくなつた」と語る。1960 年代から 70 年代の商店街は店と店の距離は近く、D さんは、「店が空家なく続いているから商店街」なのだとする。同様の語りは、富士通に務めていた N さん(1949 年生まれ)の語りにおいてもみられる。N さんは現在の商店街の様子を「歯抜け」の状態と表現する。「むかしは店が続いている通りだったんだよ」と話し、劇場通りに空き家が増えていることを懸念していた。現状商店街組合が「街路灯維持団体」になりつつあると語る E さんによれば、街路灯の維持費は商店経営者だけでなく、通り沿いに住む個人からも 2 千円程度をお願いしているのだと話してくれた。劇場が壊された今、劇場通りの記憶をどのように継承していくかが課題となっている。
- (5) 須坂新聞社/NP ウォンツ発行 2020 年
- (6) 『須坂市史』1981: 729
- (7) 現在も文化施設として公開されている小田切家住宅の水車小屋に、屋敷内に水を引き入れ動力として使用していた名残をみることができる。



- (8) 『信濃蚕糸業史』1937：1028
- (9) 『須坂市史』1981：581
- (10) 『須坂市史』1981：589
- (11) 『須坂市史』1981：657
- (12) 『須坂市史』1981：678
- (13) 『現行長野県法規第三綴』1903：299
- (14) 料理業 30 余戸、芸妓置屋 10 余戸（『須坂市史』1981 年年表より）
- (15) 須坂劇場と同時期に開場している長野県岡谷の「宝劇場」（1917 年）、「三沢座」（1921 年）は、製糸家によって、工女の慰安や娯楽目的のために設立されたとする。一方、工場法施行以前にも、全国各地の工場に劇場を建設する動きが確認されることにも留意しておきたい。「現に神戸の紡績会社の如き又向島の鐘ヶ淵紡績会社の如きは、或點に就ては工場法が要求する以上の事をやつて居る。例へば浴場を設けるとか劇場を設けるといふ如き法律の命ずる所でない事までもやつて居るのである」（『自治之開発訓練』1912）
- (16) 開場初日の『信濃毎日新聞』は、劇場開場を次のように伝えている。「●須坂座開場式 上高井郡須坂町劇場開場式は一日午後一時半より挙行されたるが新築劇場裏上町附近の通りには吉右衛門を始め新十郎、東蔵、糸三郎、米吉、玉之介等の藝名を染め抜きたる幟を林の如くに對て列ね又劇場表には紫の幔幕を張り渡し積樽庵にて景気を添へ内部は幔幕に大旗小旗色提灯美麗なる造花等にて絢爛目も目映き迄に裝飾を凝らしたり最初先づ田中社長は開式の辞を述ぶるや田中専務取締役は建築報告を為し次に渡邊上高井郡長、小林須坂警察署長、西澤郡会副議長、町村長総代嶋田保科村長、新聞記者総代池田三松、山下須坂町長諸氏の祝辞あり田中社長の閉式の辞にて式を閉ぢ来賓一同に晝餐を餐し直に劇場の木戸を開きしに黒山の如くに集まり開場を今や遅しと待ちに待ちたる観客は雪崩を打ちて場内に押し入り瞬間にして場内立錫の餘地なき有様となりたれば木戸を締切り午後三時より賑々しく開幕をなしたり尚同日団体見物として東行社六工場の工女千餘名なり夜に入りては信濃電燈にて設けたる最新式のイルミネーションと賑ひを見物せんと集まれる人々にて劇場附近は押すなゝの騒ぎなりし（一日須坂電話）」（『信濃毎日新聞』1914 年 12 月 1 日）
- (17) 須坂市誌編さん室編『須坂市誌』第 5 卷 2016：239
- (18) 『信濃毎日新聞』1914 年 12 月 1 日
- (19) 資本金 1 万円、1 株 50 円 200 株として株の募集を決定、劇場建築を協議したとされる。
- (20) 1914 年当時、高澤五兵衛は能登新商店取締役、小林由之助は信陽銀行および須坂倉庫会社で取締役を務めた人物であり、片桐菊蔵は玉の井醸造会社取締役の任にあった。須坂劇場の取締役の顔ぶれは、明治末には東行社の生産高の半分を占めていた田中製糸所経営者に加え、出資者の多くが東行社関係者を占めていた信陽銀行の取締役など、東行社との関係性が深い。田中裕治は劇場近くの田中製糸所の経営者であり、田中邦治は劇場開場前年にあたる 1913 年には須坂町議会議員を務めた代議士として知られる。須坂劇場開場の 1914 年には吉田町に 232 釜の工場を設け（1917 年廃業）、事業拡大期にあったと推察される。
- (21) 『信濃蚕糸業史』1937：1162
- (22) 『信濃蚕糸業史』1937：1212
- (23) 淀 1961：132
- (24) 工女（1899 年生まれ）だった女性の語りから（『須高』27：115）
- (25) 『須坂市史』1981：666
- (26) 『須坂市史』1981：684
- (27) 須坂図書館の設立時期については文平（2017）を参照した。
- (28) 「その頃の須坂へは、横浜から生糸の買い付けに来る商人達が多く、それらの接待のために、料理屋や芸者屋が繁盛して芸妓の数が多く、又良い芸妓も揃っていて、商人達の間では評判がよかったようであった」（『穀町区誌』1993：11）
- (29) 『須坂市史』1981：590
- (30) 『須坂市誌』2016：138

- (31) 「須坂市年表」に1966（昭和41）年、テレビの普及により須坂市内の電気館末広映画館が閉館するという事項がみられるほか、『須坂市史』においても同様に市内の映画館の閉館の理由として挙げられている（『須坂市史』1981：988）。
- (32) 『須坂市史』1981：987
- (33) 『須坂市誌』第2巻
- (34) 『信濃毎日新聞』1942年11月20日
- (35) 日本社史全集刊行会編1977：65
- (36) 宮沢彰一「電子工業をささえる婦人労働」須高地域史研究会編1984：154-155
- (37) 『須坂市史』1981：918
- (38) 『須坂市史』1981：969

## 参考文献

- 市川秀之 2001 『広場と村落空間の民俗学』 東京：岩田書院。
- 伊藤友久 1991 「長野県の劇場建築——劇場がまだ芝居小屋と呼ばれていた頃」 信濃史学会編『信濃』43（5）：388-409。
- 井上友一 1912 『自治之開発訓練』 東京：中央報徳会。
- 今井誠太郎 1932 「須坂製糸業発達の地理学的吟味（二）」『信濃教育』544：56-66。
- 浦部智義・渡邊洋一・川島慶之 2017 「東北地方に現存する芝居小屋の実態と地域における役割に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』82（739）：2240-2248。
- 小野澤章子・細江達郎 2012 「地方都市における近代芝居小屋の盛衰：盛岡市の検討」『岩手フィールドワークモノグラフ』14：1-17。
- 亀川星二・工藤宏子・兼子純 2009 「須坂市中心市街地における商業機能の変容」『地域研究年報』31：45-62。
- 神戸鬼太郎編 1903 「現行長野縣法規第三綴」 長野県埴科郡：令省社。
- 穀町区 1993 「穀町区誌資料集（第一集）」 長野：穀町区。
- 後藤和子 1996 「地域社会における経済発展と文化形成——明治初期の岐阜県東濃地方の劇場型農村舞台を素材として——」『調査と研究：経済論叢別冊』11：5-18。
- 近藤瑞男 2011 「芝居町」 服部幸雄・富田鉄之助・廣末保編 『歌舞伎事典（新版）』 東京：平凡社。
- 都市デザイン研究体編著 2009 『日本の広場』 東京：彰国社。
- 信濃毎日新聞社 『信濃毎日新聞』 1914年12月1日、1942年11月20日。
- 須坂市史編纂委員会編 1981 『須坂市史』 長野：須坂市。
- 須坂市誌編さん室編 2014 『須坂市誌』第2巻（地誌・民俗編） 長野：須坂市。
- 須坂市誌編さん室編 2016 『須坂市誌』第5巻（歴史編3） 長野：須坂市。
- 須坂新報社編 1928 『須坂商店案内』 長野：須坂町（須坂市文書館所蔵）。
- 須高地域史研究会編 1984 『須坂・上高井の百年』 長野：須坂新聞社。
- 須高郷土史研究会・小布施町郷土史の会・高山史談会・若穂郷土史研究会編 1981 『写真集：須坂・小布施・高山・若穂百年史』 長野：須坂新聞社。
- 鈴木無二 2007 「移動の構造・移動の経験」 長田攻一・坂田正顕・千葉文夫共編 『道空間のポリフォニー』183-207 東京：音羽書房鶴見書店。
- 関三雄 2007 「道、移動、そして景観：視覚景観論を超えて」 長田攻一・坂田正顕・千葉文夫共編 『道空間のポリフォニー』209-235 東京：音羽書房鶴見書店。
- 大日本蚕糸会信濃支会編 1937 『信濃蚕糸業史（下巻）』 長野：大日本蚕糸会信濃支会。
- 竹内伊四郎編 1916 『大日本紳士名鑑』 東京：明治出版社。
- 春原良子 1990 「今は昔須坂劇場繁昌記」 須高郷土史研究会編 『須高』31：102-106。

- 福田アジオ 1996 「日本の村落空間と広場」『国立歴史民俗博物館研究報告』67：9-25。
- 文平玲子 2017 「須坂市の読書活動」『信州大学附属図書館研究』6：79-90。
- ジェイン・ジェコブス 1977 『アメリカ大都市の死と生』黒川紀章訳、東京：鹿島出版会。Jane Jacobs 1961 *The Death and Life of Great American Cities*. New York: Random House.
- 中西進 1985 『日本文学新史』第4巻。
- 西成典久・斎藤潮 2004 「石川栄耀の広場設計思想 新宿コマ劇場広場めぐって」『都市計画論文集』39：907-912。
- 日本社史全集刊行会編 1977 『日本社史全集——富士通社史——』東京：常磐書院。
- 元岡展久 1996 『18・19世紀のフランス劇場建築に関する研究』（博士論文）（国会図書館デジタルコレクション）公開、最終閲覧日 2023年12月19日：<https://dl.ndl.go.jp/pid/3127310/1/1>。
- 守屋毅 1985 「都市と劇場」梅棹忠夫・守屋毅編『都市化の文明学』39-67 東京：中央公論社。
- ヴェンセスラウ・デ・モラエス 1941 『極東遊記』（花野富蔵訳）東京：中央公論社。
- 山崎浩隆 2018 「大正・昭和初期の子どもの文化形成における地方劇場の役割：熊本県山鹿市に現存する八千代座の記録と記憶をもとに」『熊本大学教育学部紀要』東京：67：143-148。
- 吉見俊哉 1987 『都市のドラマツルギー：東京・盛り場の社会史』東京：弘文堂。
- 淀サキ子 1961 「須坂製糸業の発展——器械製糸導入期を中心に」『法政史学』14：124-134。